

Brotzman SB, Wilk KE (著), 木村彰男 (監訳)

リハビリテーションプロトコール—整形外科疾患へのアプローチ, 第2版

藤谷順子 (国立国際医療研究センター病院リハビリテーション科)

本書の初版は1996年に原書が, 1998年に翻訳版が出され, A5変型版, 厚さ1.5cm程度の軽快な書籍ながら, ちょうど知りたい内容を盛り込んだ有用な本であった。どの時期にどのような訓練をしてどこまでの動きを許可するのか, そしてそれはなぜなのか, がコンパクトに述べられていたので, 整形外科を志望する研修医にも勧めてきた。

第2版は残念ながら4cm以上と厚く, 重くなってしまったが, 内容はさらに充実している。さまざまな四肢の骨折, 脱臼, 損傷, 拘縮について, 診察, リハビリテーション(と安静度の)プロトコール, その理解に必要な病態の解説が, 図表を多用してまとめられている。第2版では診断基準・分類など, 整形外科の教科書的な要素も増強されたため, これだけを参照すればカルテが書けるようなテキストとなった。プロトコールは初版同様, 目安日数の記載があるとはいえ, 第1期, 2期, 3期というように治療過程に沿って, ゴールと訓練・安静度指示がまとめられている。したがって日本の臨床でも, また急性期を過ぎた症例を診る場合にも応用することができる。図や写真が多いため, 訓練スタッフのいない施設で患者に遭遇しても(あるいは知人に相談されても)自ら訓練指導をすることが可能である。病態と治療経過の解説があるうえに, 「○○ならば○○して

もよい」という記述も多いため, 患者の質問にも理論的・具体的に答えられるのが特色である。本人に読んでもらっても差し支えない。

初版との相違は, 病名がより多彩となり, 各項目の記述内容が増えたことである。例えば, 手の骨折で5頁だったものが, 舟状骨骨折だけで7頁, 橈骨遠位端骨折だけで17頁となっている。項目は, よく遭遇するような疾患や病態を中心に柔軟に選択されており, 脳震盪や大腿四頭筋肉ばなれ, ランニング障害なども項目に挙がっている。

欠点は, 頸椎・腰椎など脊椎関連が全く含まれていないことである(初版には腰痛があったが第2版では消えた)。また関節炎として股OA, 膝OAはあるが, リウマチもない。全般的に外傷系～スポーツ系の, 外来疾患が中心のラインアップである。逆にいえば, 日本のリハビリテーション関連書籍には記載の少ない外来疾患について詳記してくれている貴重な書籍である。整形外科医, リハビリテーション科医, 理学療法士, 作業療法士はむろんのこと, スポーツ医学関係者, 校医, また外来で四肢についても相談される内科かかりつけ医でも, 参照するに便利で実用的な書籍としてお勧めできる。

(A5判変 944頁 定価 11,000円+税 メディカル・サイエンス・インターナショナル刊 2010)